

日本文学の魅力に迫る

～日本三大隨筆を読む 「方丈記・徒然草」編～ 徒然草 6

講 師：現代歌人集会 理事長 林 和清先生

日 時：1月 26 日（月） 10：00～11：50

■第 73 段～110 段

各段の原文読みと現代訳を交えた解説で現代にあてはまつても考えられる内容、教訓有り苦笑有り・・・



■第 73 段

世に言い伝えていることは、真実では興味のないものなのか、多くはみな虚言である。人間といふものは、實際以上にこしらえ事を言いたがるのに、いわんや年月を過ぎて、世界も代わっているから、言いたい放題を虛構し、筆でさえ書き残しているからそのまま事実と認定された。それぞれの道の達人のえらかったことなど、わけのわからぬ人でその方面に知識のない輩は、むやみに神様のように崇めて言うけれど、その方面に明るい人は、いっこうに崇拜する気にもならない。評判に聞くのと見るのとは、何事でも相違のあるものである。



そばからばれるのも気が付かず口任せにしゃべり散らすのは、すぐに根もないことと知れる。また、自分でもほんとらしくないと知りながら、人の言ったままを、鼻をうごめかしながら話すのは、別段その人の虚言ではない。もっともらしくところどころは不確かそうによくは知らないと言いながら、それでいて、つじつまを合わせて話す虚言は恐ろしいものである。自分の名誉になるように話されている嘘は何人もしいて取り消そうともしない。人が皆面白がっている嘘は自分ひとり打ち消すのも変なものだと、黙って聞いているうちに、つい証人にまでされてしまって、いよいよ事実と決定してしまう。

■第 89 段

奥山に猫又というものがあつて人を食うものであると、ある人が言うと、山でなくともこの辺にも、猫の年功を経たものが猫又に成り上がって人を取ることはあるものですよと言うものもあったのを、何阿弥陀仏とかいう連歌をする法師が、行願寺の付近に住んでいたのが聞いてとり歩きをする身分だから、用心しなければと思っていたところから、ある所で連歌で夜ふかしてただひとりで帰つて、小川の端を通りかかっていると、噂に聞いた猫又がはたしてこの坊主の足もとへふと寄つてくると、すぐさまかきのぼり、首のあたりに喰つこうした。肝をつぶして防ぐ力さえ失せ、足も立たず小川へ転び入つて、助けてくれ猫又だ、助けてくと叫ぶので、あたりの家々から松明などつけて駆けつけて見ると、近所に顔見知りの坊主であった。これはどうなされたと川の中から抱き起こして見ると、連歌の贈物に取つて来た扇や小箱などを懷中していたのも水に浸つてしまつてゐた。不思議と命は危うく助かつたらしく、ようやくのことに家に帰り入つた。飼い犬が、暗中にも主を知つて飛びつたのであつたそうな！

■第 110 段

双六の上手と言われた人に、その方法を問うた筈があつたが、「勝とうと思ってかかつてはいけない。負けまいとして打つのがいい。どの手が一番早く負けるかということを考えて、その手を避けて、一目だけでもおそらく負けるはずの手を用いよ」と言つた。

この道に通じたものの教えである。身を治め國を安泰ならしめる道とても、またこの通りある